

夏の光あふれる「みちのく津軽」へのいざない

スポーツエイド・ジャパン代表 舘山 誠

津軽の城下町・青森県弘前市で生を受けた私は、小学校低学年までどうしようもない虚弱体質で、それこそ「病気のデパート」そのものでした。当然、外で遊び回ることも少なく、家にこもりがちな私は、母親がどこからか手に入れてきた地図帳(当時の中学校の教科書)が気に入って、それを飽きることなく眺めている日々。そのおかげで、いつの間にか国内はもちろんのこと、世界の地理に人一倍興味を抱くようになり、早く丈夫になって見知らぬいろんな土地をめぐるみたいという思いに胸を膨らませるようになっていました。

やがて健康をとり戻すと、その思いはますます募るばかり。また、津軽の長くて厳しい冬にもいささかうんざりしていたし、津軽人の気質の一つである「もつけ」な振る舞いをみるのも嫌だったので、とにかく早く津軽を飛び出したくて仕方ありませんでした。

そして、いよいよ高校卒業を待って上京。以来、首都圏に住みつき、休日には地図帳で知ったあちこちの土地に出かけて、かつての思いを果たしては満足感に浸っていました。本州北端の津軽にいたら、こうはいかなかったでしょう。

私は津軽に戻ることなどまったく眼中にはなく、家庭もこちらに築いて、好きでなかった故郷・津軽からの脱出を図ったのでした。その後も別に郷愁にかられることもなく、たまに帰省する程度。やはり、津軽の風土が好きになれなかったのだと思います。

それから長い年月が流れました。仕事も長年勤めていた医療の場から離れ、NPO 法人スポーツエイド・ジャパンを立ち上げ、現職に精を出しています。

今の仕事で何が楽しいかと問われたら、机上でのコースづくりから始まる新規大会の構築をまず上げます。そう、机上でのコースづくりは、私がかつて地図を眺めては見知らぬ土地に思いを馳せる行為に少し似ています。特に「川の道」、「本州縦断」のような超長距離レースのコースづくりは、寝食を忘れるほど楽しい作業です。

嬉しいことは、何と言っても多くのランナーが私たちが主催する大会に参加して楽しみ、喜んでくれることに尽きます。人に喜んでもらえることほど嬉しいことはありません。そのためには、つつい調子に乗ってやり過ぎてしまいそうになる自分。って、「もつけ」？ 最近になって、私もやはり「もつけ」な津軽人そのものなのだと思うようになってきました。

津軽の冬だって、厳しく長いからこそ、春の桜をより華やかに、夏の夜祭りをより勇壮に、そして秋の紅葉をより鮮やかなものにしてくれるのだと思うと、何か愛おしい気持ちにさせられます。徐々に、我が故郷・津軽に愛着を持てるようになってきたし、津軽で生まれ育ったことを誇りに思えるようになってきました。なぜか、今は津軽がやけに素敵に思えます。

だからでしょう。津軽でランニングイベントを開催して、多くのランナーに素敵な我が故郷・津軽を心ゆくまで味わってもらいたいと強く思うようになったのは…。

こうして、私の思いが詰まった「第1回みちのく津軽ジャーニーラン」が始まることになったのです。ついては、ここにコース案内をざっとさせていただいて、皆さまの本大会への関心を煽ることにします。

スタートは JR 弘前駅前。ここから、弘前市の目抜き通り土手町(今は郊外の大型スーパーに客足をとられ、往時の賑わいはありませんが)に出て、お城と桜で名高い「弘前公園」を經由し、津軽富士・岩木山麓を目指します。因みに、公園内の弘前城本丸から望む岩木山の姿は逸品。

健全な文学を志した作家・石坂洋次郎(弘前市出身)の代表作「青い山脈」は、当時、女学校の教員であった石坂が疎開中の女学生たちから聞いた学生生活がこの小説の題材であり、青い山脈こそ岩木山であるとも言われています。また、津軽のシンボルでもあるこの秀峰は3つの頂きからなっており、眺める場所によって山容が劇的に変化します。本大会では、ほぼ1周することになるので、あらゆる方向からの岩木山の眺望を楽しむことができます。

次に向かうのは、世界遺産に登録されている白神山地の北東端にある「白神の森」。ここでは、ブナの原生林に拓かれた遊山道(2.2km)を周回し、ブナの「森の母」たる所以を実感していただきます。

その後、日本海に出て津軽藩の海の玄関・鯨ヶ沢港(海の駅わんど)で一息ついて、津軽半島を北上。途中、縄文晩期の土偶や土器、漆器が出土する亀ヶ岡遺跡、中世の栄華を今に伝える十三湊の遺跡をとくと見物するのもいいでしょう。ただし、見物はこれらの地に日没前に到着することが条件です。

しばらく右手に広がっていた十三湖に別れを告げ、脇元海辺ふれあいゾーンへと進みます。そのゾーンのなかにある宿泊所「鯨御殿」では、食事、入浴、仮眠がとれるように整えておきます。

羽を休めた後、さらに日本海岸沿いに北上し、中泊町・小泊地区へと向かいます。ここで、我が国の近代文学を代表する太宰治(金木町:現五所川原市出身)の小説「津軽」を重ね合わせることにしました。

「私(津島修治:太宰の本名)は、久しぶりに故郷・金木町に帰ることになった。そのついでに、津軽各地を見て回ることにして、懐かしい人々と再会する。そして小泊村を訪ね、かつて自らの子守をしてもらった、越野タケを探し当てる」。(ウィキペディア「津軽」のあらすじより引用)

そのタケと再会したといわれている小泊小学校の運動場の隣にある「小説津軽の像記念館」が折返し点となります。

来た道を十三湖の手前まで戻り、そこから国道に沿って南下し、次に太宰の生家「斜陽館」を訪ねます。近代和風住宅として国の重要文化財に指定されている「斜陽館」は、ぜひ足を止めて見学したいところです。

津軽平野の中央部あたりに位置する五所川原の夏の風物詩は、最近になって全国的に知名度を高めつつある「立佞武多」。展示されているのは、実際の祭りのときに運行される本物で、迫力は想像以上。一見の価値があると思います。

五所川原市街地からは板柳町(ワコールの福士加代子選手の出身地)～藤崎町へと豊穡な津軽平野一面に広がる稲田とりんご畑のなかを貫き、城下町の風情漂う黒石市街地へ入ります。

江戸時代の情緒を今も残す黒石の日本の道百選「こみせ通り」。木造の今で言うアーケード・こみせ(小見世)は、冬の吹雪や積雪、また夏の日差しから身を守ってくれる、この地方特有の貴重な遺産。もちろん、この「こみせ通り」も通り抜けます。

長い旅路の最終章となる田舎館村では、11種の稲を植え分けて描き出した巨大な「田んぼアート」を鑑賞してください。土産話の一つになる筈です。

ゴール地点は、弘前駅付近にある「さくら野百貨店&ホテルリコルソ弘前」。そこには天然温泉、休憩室、レストランあり、また何でも調達できるし、何とここから東京方面行き的高速バスも出ているので、帰りの足のことを考えてもゴール地点として申し分ない環境にあると思います。

以上のように、本大会のコースは津軽の主な名所旧跡、景勝地、および津軽の風土の匂いを感じとれる地域をできるだけ繋いだ道筋に、太宰治の小説「津軽」を重ね合わせたもので、きっと多くのランナーに満足していただけると自負しております。

今、我が故郷・津軽は厳しい冬のなか。だけど、間違いなく春を迎え、やがて夏がめぐってきます。7月の津軽は梅雨の影響も少なく、暑さもさほどではありません。親愛なる変態?ランナーの皆さま、夏の光あふれる我が故郷「みちのく津軽」を自らの脚で旅してみませんか!?